随筆文学について

中島関爾

一般に‘essay’とよばれるものの内容はいろいろあつて，文芸的又は随筆的小論，評論，試論，特殊の主題に関する説，小品文，筆のすさび，漫筆あるいは随筆——‘stray notes; fugitive essays; miscellaneous writings; occasional writings; a miscellany; literary composition upon a particular subject’を含む。一方，‘treatise; dissertation’が理路整然とした学術的論文であるのとちがつて，通常，‘essay’は文体が極めて自由で，個性的色彩が強い。

1

モンテーニュ[1] (Michel Eyquem de Montaigne, 1533—92) はその名著 *l'Essais*（随想録）によってしられている如く，近代西欧における‘essay’の元祖である。彼はギリシヤの伝記作家 Plutarch (46?—120?) の作品の愛読者であったので，彼の「随想録」の‘vocabulaire’と‘style’は Jacques Amyot[2] (1513—93)——‘the Vatican text of Plutarch’によって *Pararell Lives* を仏訳した——に負うところが多い。また，モンテーニュは Pierre de Ronsar[3] (1524—85) をはじめ七詩人の‘Pléiades’（すばる派）の語法や文体にも大いに学んだといわれる。

しかし，彼は *l'Essais* を書くに当っては，彼独自の判断によって，用語を選び，文体についても，極端な‘classcism’におちいつて，固苦しいものにならぬよう努めた。形式においては，大体に，彼は明確な韻律的抑揚——‘definitely rhythmical cadence’——に拘泥しなかったにもかかわらず，*l'Essais* の文章はわれわれ読者の耳に快的にひびき，その文体は平易で，しかも変形自在——‘ease and flexible’——であり，それがモンテーニュの文体の主な特徴となっている。

さて，文学作品がわれわれ読者に本当に影響をあたえるのは文体という形式をまとった内容の思考方法であるから，*l'Essais* においても，たとえ，われわれが文学における形式の重要性をどんなに強く弁護するにしても，この作品の

主要価値を文体に帰するわけにはいかない。

Shakespeare を除く，他のあらゆる作家と同じく，モンテーニュは彼の時代の知性的，倫理的様相を十二分にあらわしている。彼が成人期に達した時，フランスの 'Renaissance' はまさにその最盛期であり，時運の変りめが始まっていた。'Réformation' がすでにもたらしていたものは平和ではなく，剣であり，学問の復興は 'pédanterie'（衒学）をぼく滅するかわりに空理空論家の外観を変えてしまつただけであった。新大陸の発見はフランスの発見者達に病気と不和と破滅をもたらしたに過ぎず，たえまない政治的闘争の恐怖がすでにフランスを脅かしていた。

このような事情から，モンテーニュは世事や人生の喜びに対してともすれば懐疑的になり，人生のむなしさを哲学的，倫理的に考えがちになった。しかしこれには彼自身の気質の特異性がつけ加えられねばならない。これは全く複雑なものであるが，それを無視すれば，彼の人生に対する懐疑を実際以上に評価して，*l'Essais* の内容を誤解する恐れがある。

彼のローマ滞在中，市当局は彼の宿の前に「新哲学の創立者」というふだを掲げた。20世紀中葉の今日でも，イタリヤ人の口にのぼるこの言葉は「モンテーニュはキリスト教の敵」を意味している。しかし，*l'Essais* を色読味覚すれば，そのような事実を推測したり，結論をひき出す確証はない。

彼がとった態度は勿論，えん曲な，批判的なものである。モンテーニュにある彼の書斎を飾ったものは厭世家や懐疑論者の碑文であるが，他方，一風変ったエセィ——もしこれもエセィと呼べるとすれば——*l'Apologie de Raymond Sebonde* を除けば，彼の *l'Essais* の趣旨は，少くともその決定的な形では，懐疑的態度と全く著しい相違がある。また，著者の死後に "Que scai-je ?" の巻頭言が記載されたことは注目に値する。著者は人生のあらゆる種類のどんな些細なことにも深い関心をもっていたので，全体として人生を雲霧の如くはかないものなどとはゆめゆめ考えなかった。彼はあらゆる信仰に強い興味と関心を示したから，彼を信仰に冷淡だと非難するのは当らない。

モンテーニュに対する誤解の主な理由は，彼の時代から今日まで，'humour' のなんたるかを殆んど理解していないフランス民族の中にあって，彼がすぐれた 'humoriste' であったという事実である。すぐれた 'humoriste' は多くの場合 'satrique' になる。一方で熱心に感じながら，他方では，ふざけて考える気質は当然その対立をもたらすが，しかし，それは必ずしも Jonathan Swift (1667—1745) 流の矛盾した対立の形式をとるとは限らない。

この点だけからみれば，モンテーニュの文学に相似た唯一のものは Charles Lamb (1775—1834) の作品であろう。もちろん両者の間には，それぞれの気質と人生経験の相違から当然に起ってくる種々の差異があるけれども，否定的でない懐疑的態度と皮肉でない 'humoriste' である点で両者は一致する。

モンテーニュほど完全に人間の喜劇をえがいた作家は少い。彼は富裕な家に生れ，父の方針によって，早期教育を受け，英国の 'public school' にも比すべき Bordeaux の Collége de Guienne に学び，当時最も著名な l'Université de Toulouse に進んで法律を専攻し，法律家となり，後，父の遺志に従ってボルドー議会に席を得たが，政争にまきこまれて，いや気がさし，モンテーニュに退き，フランス後期ルネサンスの人生哲学者として *l'Essais* をものするに至った。彼の作品は「随想録」であって，英文学の 'miscellaneous literature' (随筆文学) とは違った種類の 'fugitive essays' であり，Francis Bacon (1561—1626) の *Essays* に比すべきものである。

2

国文学における古典の代表的随筆としては，吉田兼好の「徒然草」と鴨長明の「方丈記」があげられる。

ここでは，少しく後者にふれてみる。

「行く川の流れは絶えずして，しかももとの水にあらず。よどみに浮ぶうたかたは，かつ消えかつ結びて，久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人とすみかとまたかくの如し。……朝に死に，夕べに生るるならひ，ただ水のあわにぞ似たりける。知らず生れ死ぬる人，いづ方より来りていづ方へか去る。また知らず，仮の宿り，たがためにか心を悩まし，何によりてか目を喜ばしむる。そのあるじとすみかと無常を争ふさま，いはばあさがほの露に異ならず。あるは露落ちて花残れり，残るといへども朝日に枯れぬ。あるは花しぼみて露なほ消えず，消えずといへども夕べを待つことなし。

「われ，ものの心を知りしより，よそぢ余りの春秋を送れる間に，世の不思議を見ること，ややたびたびになりぬ。……

「すべてあらぬ世を念じ過しつつ，心をなやませる事は，三十余年なり。その間をりをりのたがひめに，おのづから短き運をさとりぬ。すなはちいそぢの春をむかへて，家をいで，世をそむけり。もとより妻子なければ，捨てがたきよすがもなし。身に官禄あらず，何につけてか執をとどめむ。空しく大原山の雲にいくそばくの春秋をか経ぬる。

「ここにむそぢの露消えがたに及びて，更に末葉のやどりを結べることあり。いはば狩人の一夜の宿をつくり，老いたるかひこのまゆを営むがごとし。これを中ごろのすみかになずらふれば，また百分が一にだも及ばず。

「とかくいふ程に，よはひはとしどしにかたぶき，住家はをりをりにせばし。その家のありさま，世の常にも似ず。広さは僅に方丈，高さは七尺が内なり。所をおもひ定めざるが故に，地をしめて造らず，土ゐを組み，うちおほひをふきて，つぎ目ごとにかけがねをかけたり。もし心にかなはぬことあらば，やすく外に移さむがためなり。その改め造る時，いくばくのわづらひかある。……

「仏の人ををしへ給ふおもむきは，事にふれて執心なかれとなり。いま草の庵を愛するもとがとす。閑寂に着するも障なるべし。いかが用なき楽みをのべて，空しくあたら時を過ごさむ。

「しづかなる暁，このことわりを思ひつづけて，みづから心に問ひていはく，世を遁れて山林にまじはるは，心ををさめて，道を行はむがためなり。然るを，汝の姿は聖に似て，心は濁にしめり。住家はすなはち浄名居士の跡をけがせりといへども，たもつ所はわづかに周梨槃特が行にだも及ばず。もしこれ貧賤の報の，みづからなやますか，はた又妄心のいたりて狂はせるか。そのとき，心さらに答ふることなし。ただ傍に舌根をやとひて，不請の念仏両三返を申してやみぬ。時に建暦の二年，やよひのつごもりごろ，桑門蓮胤，外山の庵にしてこれをしるす。

月かげは入る山の端もつらかりき，
たえぬひかりを見るよしもがな。」

以上「方丈記」引用文の大意をパラフレィズ(4)すると——

"Of the flowing river the flood ever changeth, on the still pool the foam gathering, vanishing, stayeth not. Such too is the lot of men and of the dwellings of men in this world of ours.…… Death in the morning, birth in the evening. Such is man's life——a fleck of foam on the surface of the pool.

"Man is born and dieth; whence cometh he, whither goeth he? For whose sake do we endure, whence do we draw pleasure? Dweller and dwelling are rivals in impermanence, both are fleeting as the dewdrop that hangs on the petals of the morning-glory. If the dew vanisheth the flower may stay, but only to wither under the day's sun; the petal may fade while the dew delayeth, but only to perish ere evening.

"Now since first I had conscious knowledge of the world about me have some forty Springs and Summers gone by, and of many strange events have I had experience.……

"There I passed my time reflecting upon this world of Impermanence (Anitya) and Relativity (Śūnyatā) as well as on the mutability of human things. Thirty years and more thus slipped by, during which I surveyed the vicissitude of my wretched life in relation to events around me. Attaining my 50th Spring, I left my house and turned my back on the world. Never did I have wife or child, and there was nothing to hinder me. I was no official, I had no emoluments; what interest had I in the world? So I lay idly five more Springs and Falls amid the clouds of Mount Ōhara.

"When the 60 th year of my life, now vanishing as a dewdrop, drew near, anew I made me an abode, a sort of last leap as it were, just as a traveller might run himself up a shelter for a single night, or a decrepit silkworm weave its last cocoon. This compared with the dwelling I had in my middle period was less than one-hundredth of its size.

"As I wax in years my lodging wanes in space. It is not an ordinary sort of hut I live in. It measures only 10 feet square and is under 7 feet in height. Having no fancy for any particular place, I did not fasten it to the ground, prepared a foundation, and on it raised a framework I roofed over with thatch, cramping the parts with crooks that I might remove it easily if ever the whim took me to dislike the locality. The labour of removing, how slight it would be!

"What the Buddha has taught for us is this: *Thou shalt not cleave to any of the things in this world of Sahāloka subject to Transmigration and of Impermanence.* So it is a sin for me even to grow fond of this straw-thatched cabin, and my finding happiness in this life of tranquillity and peace is a hindrance to salvation and enlightenment. Why then should I let the days be filled with the vanity of exultation in an empty joy?

"In the peace of daybreak once meditating upon this doctrine, I asked myself: *You have fled from the world to live the life of a recluse amid the wild woods and hills, thus to bring peace to your soul, and walk the way*

of the Buddha. Now you have the appearance of a saint, and yet your soul is full of turbidities. Although your cabin is a slur on the memory of the habitation of Jōmyō-koji(Vimalakīrti), in virtue you are inferior even to Shuri-Handoku(Paṇḍaka).Is your degradation the result ofyour poverty and mean condition, your inheritance from a previous existence, or have your trains of thought destroyed your mind? What answer could my soul give? None. I could but move my tongue as it were mechanically, and twice or thrice repeat involuntarily the formula: *I take refuge in the Buddha of Boundless Light* (Namo-mitābhaya-buddhāya). I could do no more.

"Written on the last day of March (of the lunar month), in 1212, by Rev. Ren-in in his cabin on Toyama.

"Alas! the moonlight
Behind the hill is hidden
In gloom and darkness——
Oh, would her radiance ever
My longing eyes rejoiced!"

「方丈記」の著者，鴨長明は山城の国，賀茂神社の世襲の神官であつて和歌，管絃の道にすぐれ，仏教を学び，漢学の素養があつた。二条天皇の応保年間，従五位に叙せられたが，高倉帝の時，昇叙をもとめて，叶わず，剃髪して，蓮胤と称した。後，鎌倉に将軍，実朝を訪ねたが，こと志と違い，空しく帰京して，ついに外山の庵にいん遁生活を送り，「方丈記」を著わした。

その趣旨は多少の皮肉——Never did I have wife or child, and there was nothing to hinder me. I was no official, I had no emoluments; what interest had I in the world?——をまじえて仏教の無常観に立ち，転変していく人生と社会の現実をとらえ，自己の内面生活に沈潜する中世国文学の随筆的小論である。

したがって，「方丈記」も，モンテーニュの *l'Essais* と同じく，英文学の 'miscellaneous literature'（随筆文学）とは異質のものである。

3

以上のべたような 'fugitive essays' や，随筆的小論や，現代日本の文壇で所謂，随筆の名で発表される 'essay'——それはエセィの下た書であって，漫筆

あるいは雑文と呼ぶべきもの——などは，英文学の随筆文学と全く異質のものである。また文芸的又は随筆的小論，評論，試論，特殊の主題に関する説，小品文等も，われわれの‘miscellaneous literature’とは別の範疇に属する。

われわれの随筆文学とは，作者が‘love and hatred; pleasure and grief; joy and affliction; success and failure; hope and despair’の現実生活にからむ‘tears and smile; pathos and humour’を，その深い文学的教養と趣味を通じて，軽妙酒脱な筆致で，時には多少の‘pedantry and sarcasm’を交じえて，千紫万紅，所狭きまでおりこんだ文学である。

随筆文学に引用された抄句には，それとはっきり現われたもの，何とはなしに忍ばせたものとを問わず，悉く典拠がある。しかも，それらは天衣無縫，何等あとを止めずに，自然に作品の中におりなされ，無秩序の中に秩序があり，微妙な音楽的調和が見出され，渾然，珠玉の芸術的完美を構成している。

斯様な‘miscellaneous literature’の典型が Charles Lamb[5]：*The Essays of Elia*;*The Last Essays of Elia* である。

ラムの父は弁護士の秘書として終始した平凡な人であるが，母方の祖母は the Plumers at Blakesware in Hertfordshire の家事取締を 50 年以上もつとめたしつかりものであった。彼は少年時代この祖母の許に度々遊びに行き，有形，無形の感化を受けた。7才の時，父の主人の紹介で，Christ Hospital に入塾し，14 才まで，この輝かしい伝統をもつ‘public school’で学んだ彼は，そこで Samuel Tayler Coleridge[6](1772—1834) と相識り，刎頸の交りを結ぶに至り，後に彼を通じて，同じく浪漫派の詩人，William Wordsworth (1770—1850) とも知己になつた。われわれはこれら二人の巨匠が彼に与えた文学上の刺戟を見逃してはならない。

秀才のほまれ高かつたラムは，コウルリヂと違い，家庭の事情から，大学進学を断念して，Christ Hospital を出て，South Sea House の書記となつた。3年後 East India House に移って 30 年以上勤務し，順次昇進して部長クラスとなり，1815 年裕福な‘pension’を貰って退職し，悠々自適の身となった。

其の間，兄の John は身勝手な男で，父の死後，遺産を独り占めして，一家の係累を離れ，自分だけの生活をたのしんだ。そのためにラムは母と姉とをかかえて苦闘し，大学進学のゆめも破れたわけだが，この兄に対しても，*Dream Chidren*; *A Reverie* にみる如く，肉親へのあつい愛情を失わなかった。

しかし，彼の生涯を通じて，最も深いえにしに結ばれた肉親こそ——従姉 Bridget Elia の名で，彼の随筆文学の完璧を示す不増不減の逸品，*Old China*

に出てくる——姉の Mary その人である。彼女こそはラムと共に，喜びも，悲しみも，苦しみも共に分ちあったただ一人の肉身であったのに，生活苦から21才の時，精神に異常を来たした。そこで彼は他の一切の愛の絆を断ち切って——*Dream Chidren*；*A Reverie* に Alice の名で出てくる Ann Simons への愛もあきらめて——それから 38 年の間，時々再発するこの呪わしい血の遺伝に戦きながら——彼自身もその悲恋の故に一時喪心状態に陥った——姉への献身に終始した。

このような家庭環境にあって，ラムは早くから，エリザベス朝の戯曲を愛読し，時折り，詩や戯曲を試みた。彼の作品をあげると，姉と共著の児童文学の逸品 *Tales from Shakespeare* や，同種の*Adventures of Ulysses*, 小説では，*Rosamund Gray*; *Mrs. Leicestr's School*, 戯曲としては *John Woodvil* があり，そのエリザベス朝の戯曲選集，*Specimens of English Dramatic Poets* の脚註には文芸批評家としての彼の卓見がうかがわれる。

しかし，英文学史上不朽の名を残したのは，彼のエセィである。ラムは 45 才をすぎて，人間的に円熟し，老後に何の不安もなく，長年勤務した East India House を退職して，悠々自適の生活にはいった——彼が退職したのは1825年（仁孝天皇の文政８年）で，終身年金は退職時の年俸の 2/3 に当る £450 これを今日の邦貨に換算すれば，大体 350万乃至 400 万と考えてよい。

従って，一部のラム研究家のいうのと異り，ラムはもはや貧しい人ではなかった。このことはラムのエセィを色読味覚する上に大切な一つの点である。

このような事情の下に，ラムはその退職少し以前に発刊された *London Magazine* にエセィを寄稿し続けることになり，後にそれをまとめて，*The Essays of Elia*; *The Last Essays of Elia* の二つの標題で 1823 年と 1833 年にそれぞれ出版した。Elia は East India House の書記であったイタリー人の名をとって雅号としたもの。

この二つのエセィこそ，われわれは英文学史上ユーニークな随筆文学と考える。そこで，本論文において，筆者は *The Essays of Elia* の中から *Valentine's Day* の一篇をとってみる。

来元，Valentine's Day は２世紀のローマ教会の司教，Santa Valentinus[7] の殉教を記念する２月 14 日の聖日を指すが，Chaucer 以来の伝説では，この日から鳥が交わり始めるというので，若い愛人同志がたわむれに，愛の手紙やいろいろの贈物を取りかわす習慣になっている。

Valentine's Day にこのような習慣が行われるに至った経緯は不明である。一説には，古代ローマの Lupercallia Day にこの習慣があり，往時の師父達がその異教の風習を根絶することの至難を認め，女性の名前を箱に入れて，恋人をえらぶ代りに，特定のセィントの名を箱に収めて，若い男性にひかせキリスト教的色彩をもたせるようにし，Valentine's Day なり，その他のセィントの聖日に，一年間の a patron Saint をえらばせて，これを a Valentine と呼ぶならわしになった。後世，それがヨーロッパに広まったもので，鳥の配偶者選択の季節と Valentine's Day の2月 14 日とは偶然の一致と考えられる。

さて，*Valentine's Day* の冒頭は——

Hail to thy returning festival, old Bishop Valentine! Great is thy name in the rubric, thou venerable Archflamen of Hymen! Immortal Go-between; who and what manner of person art thou? Art thou but a *name*, typifying the restless principle which impels poor humans to seek perfection in union? or wert thou indeed a mortal prelate, with thy tippet and thy rochet, thy apron on, and decent lawn sleeves? Mysterious personage! Like unto thee, assuredly, there is no other mitred father in the calendar; not Jerome(8), nor Ambrose(9), nor Cyril(10); nor the consigner of undipt infants to eternal torments, Austin(11), whom all mothers hate, nor he who hated all mothers, Origen(12); nor Bishop Bull(13), nor Archbishop Parker(14), nor Whitgift(15). Thou comest attended with thousands and ten thousands of little Loves, and the air is

Brush'd with the hiss of rustling wings(16).

Singing Cupids are thy choristers and thy precentors; and instead of the crosier, the mystical arrow is borne before thee.

「うれしや，めぐり来るなっかしの聖ワレンタィン祭！ 偉大なるは教会暦のひじりの御名，えにし結びのいと尊き師！ とわの仲人役。そも御身は何人におわします？ 御身はあわれな人間にみようとの契りを固めさせんとする不断の主義を象徴した名前にすぎぬのか？ それとも，まこと，肩掛と袈裟，前だれと似つかわしい寒冷紗の袖をつけた有情の高僧にておわすか？ 摩訶不思議なお方よ！ たしかに，あなたの如く，法冠をつけた師父はこよみの中には2人とおわさぬ。ジェロム聖人も，アムブローズ司教も，サィリル聖人も見出せず，洗礼を受けずに夭折した子供を地獄に堕とす委託者として，世の母親達のきらうオースティン司教も，世の母親達をにくんだオリジン聖人も，ブル主教

も，パーカー，ワィトギフト両大主教の名ものっていない。あなたは無数の可愛い愛の神々を伴って御出ましになる。大気を

かすめるはさらさらといふ翼の音。

「歌う愛の神々はあなたの合唱者であり，音頭取りである。そして笏杖のかわりに，摩訶不思議な矢をあなたは持っておいでになる」

自分の青春をぎせいにして，姉のために生涯献身したラムは *Dream Children; A Reverie* の最後に曰く

We are nothing; less than nothing, and dreams. We are only what might have been, and must wait upon the tedious shores of Lethe millions of ages before we have existence, and a name.

「われらは無縁の衆生。すべては夢。幽冥界の河岸に永劫に侍べり，生前のすべてを忘却してのち，生をこの世に享くべきもの」と。

忘れんとして，忘れ得ぬかの人，アリスに対する悲しいあきらめを胸に秘めつつも，この *Valentine's Day* の冒頭には世の若い人々の幸福をねがう人間，ラムの姿がみられる。

そして，この2月 14 日は——"This is the day on which those charming little missives, ycleped Valentines, cross and intercross each other at every street and turning."「ワレンタインズと呼ばれる数々の美わしく可愛い音信があらゆる大路，小路で互いに交錯する」ほほえましい日であり，一方では，"The weary and all forspent two penny postman sinks beneath a load of delicate embarrassment, not his own."「使者の役目の郵便屋は，たった2片の切手のために，中味はデリケィトだが，御本人の郵便屋にとっては，何の縁もゆかりも露しらぬ恋のいざこざの重荷——手紙が沢山で重く，しかも，それらを無事，確実にとどけねばならぬ重い使者の役目——でくたくただ」とのヒューマラスな情景を展開する。

また，待つ身にとって，郵便屋のノックは——It "gives a very echo to the throne where hope is seated."「希望の玉座のこだまをそっくりそのまま伝える」

この文句は，もちろん，*Twelfth Night, A.* II, S. 4, 21—2 の次の文の転用である——

It gives a very echo to the seat
Where Love is throned.
「あの曲は恋の玉座のこだまを
そっくり伝えています」

ここで，しばらく *Twelfth Night* のその場面の Duke Orsino of Illyria と Cesario——実は男装の麗人 Viola——との会話に思いを致すと，Viola は館の中で演奏されるあの曲をどう思うかと問われて，上の如く，その演奏曲は乙女の心臓に強くこだますると，ひそかに公爵を想っていることをほのめかす。しかるに Cesario が男装の麗人だとは全然気ずかぬ公爵は，かねて Lady Olivia に想いをよせ，通わす文は度重なれど，一度もいろよい返事を得ぬために，気に入りの侍臣 Cesario に改めて恋文の使者の大役を命ずる。心の丈けを述ぶるによしなき Viola と Lady Olivia に夢中になり，それと気ずかぬ公爵。この恋のいざこざに感興ひとしおなのが観客ということになる。

Shakespeare を自家薬籠中のものとしたラムは *Twelfth Night* に拘束されることなく，Shakespeare を生かして，彼のエセィの面目を発揮している。

Valentine's Day の結びは——

"Good morrow to my Valentine", sings Ophelia; and no better wish, but with better auspices, we wish to all faithful lovers, who are not too wise to despise old legends, but are content to rank themselves humble diocesans of old Bishop Valentine and his true church.

狂乱の Ophelia が歌う小唄は——

To-morrow is Saint Valentine's day,
　All in the morning betime,
And I a maid at your window,
　To be your Valentine.
Then up he rose, and donn'd his clothes,
　And dupp'd the chamber door;
Let in the maid, that out a maid,
　Never departed more.

——*Hamlet*, A. IV, S. 5, 46-53.

「明日は聖日ワレンタイン，
　夜のひき明けまつ先に，
お窓の下の待ち乙女，
　さまのお方になりましよう。
さまは目ざめて，きものをつけて，
　部屋のとぼそをそっとあけ，
いれた乙女が出る時は，

うぶな娘でないわいな。」

King Hamlet の急逝，疑惑，亡霊との対面，仇討の誓言，そして詐狂。万斛の血涙をのんで Ophelia への愛想ずかし，純情一途な彼女の発狂。

Get thee to a nunnery, why wouldst thou
be a breeder of sinners?

——*Hamlet*, A. III. S. 1, 120.

「尼寺へ行け，なんで罪業深い人間を
育てんとするのか？」

Be thou as chaste as ice, as pure as snow, thou shalt not escape calumny.
Get thee to a nunnery, go; farewell……
To a nunnery, go; and quickly too. Farewell.

——136—7, 139—40.

「たとい，そなたが操正しいこと氷の如く，雪の如く清くても，世間のそしりは免れぬ。尼寺へ行け。さらば……
尼寺へ行くのだ。少しも早く。いざさらば」

かくて，Ophelia は——

Oh, woe is me,
To have seen what I have seen, see what I see!　——160—1.

「ああ，何と因果な
あの方の昔をみた目が，今日の今のあの方をみるとは！」——なげきのはてに，気も狂い「明日は聖日ワレンタイン」をくちずさみ，ついに Hamlet の母，Gertrude をかくなげかせるに至る。

There, on the pendent boughs her coronet weeds
Clambering to hang, an envious silver broke;
When down her weedy trophies and herself
Fell in the weeping brook. Her clothes spread wide,
And, mermaid-like, awhile they bore her up;
Which time she chanted snatches of old tunes.

——A. IV, S. 7, 174-79.

「しだれ柳に野花の冠かけようと
よじ登ったに，意地悪く横枝さけて，
野花の冠も，その身もとに
むせぶ小川に落ちこんで，もすそひろがり，

人魚の如く，しばし体を支えたが
そのまま小唄くちずさみ」と。

けれども，ラムに言わせると——

……and no better wish, but with better auspices, we wish to all faithful lovers, who are not too wise to despise old legends, but are content rank themselves humble diocesans of old Bishop Valentine and his true church.

「そんなふうでなく，もっと幸福であるように，恋に忠実なすべての人に望むそのわけは，彼等が大変利口者で，古いワレンタイン聖日の伝説を軽蔑しないからではなくて，なつかしのワレンタイン司教のつつましい教区民であり，そして同司教の恋の檀家たることに満足しているからだ」と。

Hamlet 母子や Ophelia のなげきを世の若い人々や，その母親達にみせぬようとの——作者自身の悲恋はそっと自分の胸にひめおいての——'too full o' the milk of human kindness'(17) のこの結びの言葉。

われわれは，この一篇のエセィからも，アングロ・サクスン民族の風土と伝統につちかわれた humour を基調とするユーニークな随筆文学の妙味を色読し，作者ラムの人間味と，深い文学的教養と，ほのかな 'pleasure and pathos; smile and tears; pedantry and sarcasm' の一端をうかがうことが出来，そして随筆文学が英文学独特のものである所以を理解するであろう。

（注）

1. *Encyclopaedia Britannica*, Vol. XVI, pp. 767—71.
2. 〃 Vol. I, p. 782.
3. 〃 Vol. XX, pp. 841—2.
4. 英文パラフレィズに当っては *The Hō-Jo-Ki* Translated by F. V. Dickins, San Kaku Sha, 1933. を参考にして，筆者の不満な点を相当訂正した。
5. Miles and Pooley: *A History of English Literature*, the Hokuseido Press, 1963, pp. 193—6.

   Encyclopaedia Britannica, Vol. XIV, pp. 234—5.
6. 〃 Vol. VI, pp. 135—8.
7. 〃 Vol. XXIV, pp. 36—40 によると，Valentine (Valentinus) には3人の同名異人がある。

(A) Laetia の使徒で，5世紀の始め Passau の初代司教となった人。

(B) Intermna の司教で，イタリーとドイツでは2月14日をこの St. Valentinus

（St. Velten）の殉教聖日としている。また血族間の紛争が起ると，その解決をこの聖人に祈るという。

(C) Cladius 皇帝のため殉難したローマ教会の長老で，フランスやイングランド及びスコットランドではこの聖人のために St. Valentine's Eve and Day の祭りを行う．

Valentine 学派の創立者で，キリストの福音の本質とギリシヤ思潮との融合をはかり，プラトーン学派及び新ピタゴーラス学派の倫理学をキリスト教の福音布教にとり入れ，イエスの示顕をギリシヤ思潮がすでに到達していた思想体系の中心原理として，アレクサンドリア学派の中のユダヤ学者とキリスト教学者とを結びつけるかけ橋の役目をなした人物。

8．L. Hieronymous (340？—420)，ラテン四大教父の一人で，ラテン語訳聖書 *Vulgate* 本を完成した。*Encyclopaedia Britannica*, Vol. XIII *E.B.*pp 630—1.

9．ミラノの司教で，ラテン四大教父の一人 (340—97)，*E.B.* Vol. I, pp. 662—4.

10. アレクサンドリヤの司教 (376—444)，*E.B.* Vol. VI, pp. 751—2.

11. ローマ教界師父の第一人者である St. Augustine (354—430)，*E.B.* Vol. III, p.78.

12. (185—254) 男根切断を以て神聖に達する要諦とした。*E.B.* Vol. XVII, pp. 839—43.

13. Bishop of St. David's (1634—1710). *E.B.* Vol. IV, p. 517.

14. Matthew Parker (1504—75), Archbishop of Canterbury. *E.B.* Vol. XVIII. pp. 298—300.

15. John Whitgift (1530 or 3—1604), Archbishop of Canterbury. *E.B.* Vol. XXIV, p. 554.

16. Milton: *Paradise Lost*, I, 768.

17. *Macbeth*, A. I, S. 5, 18.